SAGAMIHARA GREEN
URL https://www.sagamiharashi-machimidori.or.jp
相模原市まち・みどり公社機関紙
さがみはらグリーン
★「さがみはらグリーン」は、まち・みどり公社本社（けやき会館内）をはじめ、市内の市立公園や公民館、図書館等に配架しています。
Vol.67 2022.09

2～3ページ▶

相模原市で増えている外来植物

麻布大学　生命・環境科学部　環境科学科
特任助教　新田 梢 氏

4ページ▶

市内の動植物を訪ねて カラフルな森の忍者 ～シタバガの仲間～

日本鱗翅学会評議員　長谷川 大 氏

ゴンズイ *Euscaphis japonica*
（ミツバウツギ科）
秋になると果実が熟して裂開し、
光沢のある黒い種子が現れます。

さがみはら SDGs パートナー
相模原市まち・みどり公社は、「さがみはら SDGs パートナー」登録団体です。

SDGsに貢献する「みどり」のあり方③

雑草たちは大切な「地球の皮膚」

国連生物多様性の10年市民ネットワーク 代表　坂田 昌子 氏

猛暑の中、汗だくになりながら、かたきのように庭の草を抜き、根こそぎ取って「すっきりしたね～」という声をよく聞きます。雑草は、庭に植栽している草木の栄養を奪う邪魔者という考えが支配的ですが、それは大きな誤解です。実は雑草たちは、庭にたくさんのメリットをもたらしています。雑草たちのもとには微生物がたくさん集まり、その死骸は豊かな土壌を創り出します。雑草と共生している菌類たちは、菌糸を張り巡らせ、土中に団粒を作り、空気や水の通り道を作ることによって、水が浸透しやすい環境を創り出してくれます。

また、雑草は土壌の乾燥を防ぐグランドカバーにもなってくれます。草取りをしすぎると雨が降っても水は浸み込まず、土を流してしまうか、泥状を作りだしてしまいます。一方、晴天が続くと土は瞬く間に乾燥してしまいます。結局、大切にしている草木も元気がなくなってゆくのです。ダメな土は簡単に水に流れ、風に飛ばされます。良い土は、ゆっくりと水が浸透し、乾いていく時もゆっくりと蒸散します。その環境を創り出しているのが、眼のかたきにされている雑草たちです。

雑草たちは、2000万年前から裸地があればすぐに進出し、土壌を流出させないという地球の皮膚の役目を担ってくれているのです。傷口を癒そうとしていると言ってもよいでしょう。多様な雑草がある庭には、多様な昆虫たちが棲みつき、庭木を食べてしまう虫を食べてくれる肉食の虫も訪れるようになり、さらに鳥たちも招き、草木につく虫を食べてくれます。１匹のシジュウカラが１年間に食べる毛虫はなんと12万５千匹！農薬も必要ありません。雑草を長めに残し、他の植物の光合成を妨げてしまうものだけ選択的に取る草取りをぜひ試してみてください。

市街地や農地等でもよく見られる“雑草”の一例

ハキダメギク

エノコログサ

ヒメオドリコソウ

コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社は、相模原市まち・みどり公社が推進する「みどり豊かなまちづくり」に協賛しています。

公益財団法人 相模原市まち・みどり公社は、地域のために活動する自治会を応援しています。

相模原市で増えている外来植物

麻布大学　生命・環境科学部　環境科学科
特任助教　理学博士　新田　梢 氏

近年、TV番組やニュースなどでもよく聞くようになった「外来種」。アライグマやハクビシンなどの動物がよく知られていますが、実は、植物にはたくさんの外来種があります。家や学校の周りでよく見る身近な植物も実は「外来種」かもしれません。相模原市でも分布を拡大しており、生態系や私たちの生活に影響がある、特に気をつけたい外来植物について紹介します。

「外来種」とは

人間の活動に伴って導入され、自然の状態では本来分布していなかった地域に生育している生物種を「外来生物」あるいは「外来種」と言います。国外由来の外来種のほか、日本国内の地域間での移動によっても、元々その地域にいなかった生物種が入った場合は国内由来の外来種となります。導入の原因となる人間活動は、飼育や栽培といった人間が生物を認識した状態で持ち込んだ意図的な場合だけでなく、土や飼料、乗り物や荷物などに混ざって知らない間に入ってしまった非意図的な場合もあります。

「特定外来生物」とは

外来種のなかでも、分布を拡大して侵略的になったものは、生態系へ影響を与え、私たちの健康や生活を脅かす場合があります。これらの外来種は管理して被害を防ぐ必要があります。2004年に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（略称「**外来生物法**」）」が制定され、特に分布を拡大して問題が大きい外来生物は「特定外来生物」に指定されました。指定された生物については、その飼育・栽培・保管・運搬・放出・輸入等を罰則つきで規制し、防除等の推進が定められました。2022年７月現在、植物は19種が「特定外来生物」に指定されています。

相模原市では、アレチウリ、オオキンケイギク、オオカワヂシャ、オオフサモ、ナガエツルノゲイトウが確認されており、これらは特に注意が必要です。

オオフサモ（環境省提供）

ナガエツルノゲイトウ（環境省提供）

オオカワヂシャ（環境省提供）

「生態系被害防止外来種リスト」とは

生物多様性の保全のために、2015年に「外来種被害防止行動計画」が示され、環境省・農林水産省によって「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」いわゆる「**生態系被害防止外来種リスト**」が作成されました。このリストでは、先の外来生物法で指定された「特定外来生物」に加えて、幅広い種が選定され、植物はおよそ200種類がリストされています。対策の方向性から「**緊急対策外来種**」「**重点対策外来種**」「**その他の総合対策外来種**」、「**侵入予防外来種**」「**その他の定着予防外来種**」、「**産業管理外来種**」に区分されています。国内由来の外来種についても対象とされました。

同リストの詳細については、環境省のサイトをご参照ください。
生態系被害防止外来種リスト-環境省

アレチウリ（環境省提供）

アレチウリ　ウリ科アレチウリ属

特定外来生物　**生態系被害防止外来種、区分「緊急対策外来種」**

北アメリカ原産で、日本では1952年に静岡県清水港で確認され、輸入大豆に種子が混入したものから拡大したといわれています。近年では、河川や畑で分布を拡大しています。葉が大きく、他の植物の上を覆ってつるで広い範囲に茂り、種子がたくさんついて増えるため、生態系や農業への影響が心配されています。相模原市でも境川沿いを中心に分布を広げています。

オオキンケイギク（環境省提供）

オオキンケイギク　キク科ハルシャギク属

特定外来生物　**生態系被害防止外来種、区分「緊急対策外来種」**

初夏から、コスモスに似た形の黄橙色の花を咲かせます。北アメリカ原産で、1880年代に園芸用や法面緑化等に導入され、全国で野生化しています。大群落を形成しやすく、河川敷や草原などで在来植物が減少するなど、生態系への影響が危惧されています。多年草で、茎や根が残っていると翌年も生えてくるため、駆除を念入りに行う必要があります。

キショウブ　アヤメ科アヤメ属

生態系被害防止外来種、区分「重点対策外来種」

初夏に水辺で鮮やかな黄色の花を咲かせます。ヨーロッパ～西アジア原産で、1890年代（明治30年頃）に観賞用に輸入され、池や川、水路などに栽培され、日本全国で野生化しています。相模原市内でも水辺に広く分布しています。繁殖力が強く、群生するため、水辺の在来植物や生態系への影響が心配されています。

トウネズミモチ　モクセイ科イボタノキ属

生態系被害防止外来種、区分「重点対策外来種」

中国原産の常緑の樹木で、公園、街路や庭から逸出しています。初夏に白い花をつけます。黒い果実をつけ、この果実を鳥が食べて種子が運ばれて拡大しているといわれています。相模原市内の平地の緑地にもよく生育しています。

※在来のネズミモチとの見分け方
トウネズミモチの葉は、ネズミモチより大型で、葉質が薄いため、陽にかざすと側脈がはっきりと透けて見えます。

アメリカオニアザミ　キク科アザミ属

生態系被害防止外来種、区分「その他の総合対策外来種」

ヨーロッパ原産で、北海道から四国の広範囲に急速に分布を広げています。1960年代に北海道で確認されており、北アメリカからの輸入穀物や牧草への混入が由来とされています。さらに、神奈川県植物誌の標本調査によると1952年に茅ケ崎市での標本が残されており、国内初帰化の記録となっています。相模原市でも国道沿いから広がり、東部の幹線道路沿いを中心に、市街地や住宅地などの乾いた場所によく生育しています。大きく成長し、種子が多数の綿毛で広がり繁殖力が強く、植物体全体に鋭い棘があるため、除去がたいへんで、生態系や家畜等への影響が懸念されています。

※在来のノアザミの場合、葉の先端のみにトゲがあります。

植物体全体に鋭いトゲがあるアメリカオニアザミ

地域の生物多様性の保全のために

外来種となる経緯は様々ですが、植物の場合、近年は園芸植物の逸出が多く、こぼれ種などによって庭先から道路や近隣に広がることもあります。外来生物法では「入れない」「捨てない」「拡げない」を外来種被害予防三原則として、環境省や地方自治体でも対策をすすめています。私たちにできることとして、まずは、「生態系被害防止外来種リスト」に入っている植物が、庭や畑、管理されている土地に生えていないか、適切に管理されているかを見直してみてはいかがでしょうか。

今後は、地域の生態系や生物多様性の保全の視点からの庭や公園づくりも期待されます。

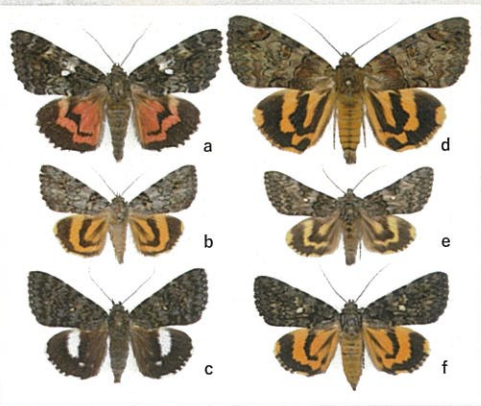
参考文献　神奈川県植物誌調査会編, 2018. 神奈川県植物誌2018 電子版. 1803pp.

市内の動植物を訪ねて

カラフルな森の忍者　～シタバガの仲間～

文・写真　日本鱗翅学会評議員
長谷川 大（たかし）氏

樹液にやってきたフシキキシタバ（南区大野台）



“木もれびの森”に生息するシタバガの仲間

ドイツの小説家、ヘルマン・ヘッセの作品「少年の日の思い出」の冒頭シーンで、友人宅を訪れた主人公の男性は、子どもの頃の趣味を再開したと話す友人から標本になった美しい蛾（が）を見せられます。そのことをきっかけに、主人公は少年時代のある思い出を語りはじめるのですが、ここに登場するのがシタバガの一種キララキシタバです。この小説は、中学の国語の教科書にも載っているので、あらすじを思い出した方もいるかもしれません。

シタバガの仲間は、前翅（まえばね）が樹皮に似たモノトーン柄（がら）なのに対し、後翅（うしろばね）は種類によって黄色や朱色、紫色など鮮やかな色彩を持ち、シタバ（下翅）はそのことに由来します。大型で美しい種類が多いことから、ヘッセの小説を引くまでもなく、愛好家の間ではとても人気の高いグループです。広葉樹の森が彼らの住み家で、夏から秋にかけて夜間に樹液に集まります。昼間は木の幹にじっと止まっていますが、その時には派手な後翅はかくれて見えないので、よほど注意しなければ、見事な保護色が背景と同化して見つけることはできません。これが“森の忍者”たるゆえんです。

それでは、シタバガの仲間を観察するには、夜の森に行かなくてはだめなのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。日中にクヌギやコナラがたくさん生えている“木もれびの森”へ出かけてみましょう。

森の小道に足を踏み入れると、目の前にあるクヌギの太い幹から何か黒っぽいものがパッと飛び立ち、すぐ別の幹に止まります。一瞬のできごとですが、何度かこれを繰り返して目が慣れてくると、朱色や黄色がフラッシュするのが見えてくるでしょう。大きくて朱色の翅（はね）を持つのはオニベニシタバ（a）、これより小さく黄色の翅を持つのはマメキシタバ（b）という種類です。ここには、ほかにもコシロシタバ（c）、キシタバ（d）、アサマキシタバ（e）、フシキキシタバ（f）などが生息しています。

残念ながらキララキシタバは生息していませんが、少し足をのばして丹沢山麓まで行けば、これにとても近縁なワモンキシタバに出会うことができます。

緑の募金運動【秋期】のお願い

秋期募金強化活動は、9月1日～10月31日に行います。
（※募金は、上記期間以外でも常時受付けいたします。）

「緑の募金運動」は、「緑の募金による森林整備等の推進に関する法律」に基づき実施しており、森林整備活動や緑化の推進のほか、被災地域の復旧・復興等に活用しています。

相模原市内で集められた「緑の募金」は、市内の緑化推進等にも活用されます。ぜひご協力をお願いします。

相模原市まち・みどり公社が推進する「みどり豊かなまちづくり」を応援しています

広告
KIRIN

広告

2022年9月1日発行／ 編集・発行者・発行所：〒252-0236 相模原市中央区富士見6-6-23　公益財団法人 相模原市まち・みどり公社
TEL：042-751-6623　FAX：042-751-2345

本紙に対するご感想、ご意見をお寄せください。ホームページにもぜひアクセスを… https://www.sagamiharashi-machimidori.or.jp